

デジタル時代の人材政策に関する検討会
第6回試験ワーキンググループ

大学等におけるIP/FE試験の活用に関するヒアリング結果

令和5年12月25日
事務局

大学等におけるIP/FE試験の活用状況①

IPAにて実施された教育機関向け普及・啓発活動の概要

- IPAでは、**2018年**頃から、高校・大学等の教育機関向けの訪問PR活動を開始。開始当初は、年間 4 – 5 件のペースで、**商業高校や工業高校を中心に訪問し、ITパスポート試験（IP）**の紹介等を実施。
- 2020年以降のコロナ禍により、受験者の減少傾向が見られたため、IPの受験者数の回復に向けた取組も兼ねて、教育機関向けの訪問活動を強化。**2022年及び2023年には、年40件（計80件）程度の大学を訪問。**【→ 訪問先は次頁参照】
- 大学では、「ITリテラシー」や「情報処理基礎」といった、主に**学部 1・2 年生向け**の授業の 1 コマや就職関連のガイダンスなどで、情報セキュリティの重要性や**Society5.0、DXの最近の社会の動向とともに、IP試験を紹介**。現在、ITは社会人として必須のスキルとなっていることを、社会の動向とあわせて紹介することで、大学側や学生には概ね好評。事後アンケートでは、7 ～ 8 割の学生がIP試験を受験したいと回答。

大学における試験の活用状況

- IP試験は、**IT・情報の領域を重視する大学の文系学部**（例えば経営情報等）で多く利用されている。大学によっては、対策講座などを開催するところもある。IT・情報の領域をかなり重視する学部では、FE試験の午前免除制度などを利用することもあるが、文系学部でFE試験を利用するところは、全体的には少数。
- 中長期的に見ると、**学生のIP受験者数は増加傾向**にある。DXの拡大等により、企業側でIP試験が広く活用されるようになり、学生が企業から内定を得た後に受験を勧められることもあるため、**学生側での受験ニーズも拡大している**模様。2023年は、2022年よりも、学生のIP受験者数が増加しており（120%程度）、訪問活動の成果が表れている可能性もある。

大学等におけるIP/FE試験の活用状況②

試験に対する教育機関からの要望

- 文系学部（特に経営学部）では、IP試験の出題範囲のうち、「ストラテジ」の領域を大学で学ぶ。後は「テクノロジー」の領域を追加で学習すれば、十分受験は可能。逆に「テクノロジー」の領域を学校で学習する工業高校や簿記等は学習する商業高校の生徒等が、「ストラテジ」の領域を後から学習することは難易度が高く、工業高校や商業高校の生徒にとっては、IP試験はやや難易度が高い試験になっている。
- 出題範囲や難易度に関して、**要望をいただくことは少ない**。出題範囲についても、広い領域を対象としていることは評価されていると感じている。「テクノロジー」についても、難易度が高いという意見は、あまり聞かない。
- 今年から大幅に変わったFE試験については、まだあまり大学の先生（情報系の先生も含め）等の間で知られていない可能性があり、今後周知の必要があるかもしれない。
- 他の検定試験と同じように、**大学を会場として情報処理技術者試験を実施したい**という要望は非常に多い。

今後の活動方針

- DXが注目されている近年、IP試験のニーズが高まっており、好機が訪れているため、今後も訪問活動は継続予定。首都圏や都市部の大学の他にも、最近では、地方の大学訪問も始めている。
- 最近では、**医療情報等の情報を活用する他分野の大学・学部**にも、関心を持っていただいている。**農学部**の先生からIP試験を紹介して欲しいというご要望をいただいたほか、**体育系**の大学でも、データ活用に力を入れており、IP試験にも関心を持っていただいたところがある。このような情報を活用する他分野の大学・学部にも、今後活動を拡大できる可能性があり、訪問を始めている。